

## 「にほふ」にまつわる思索 万葉懷古草子⑥

カルティエ・ラタンにあるクリュニー美術館で、『一角獣を連れた貴婦人』という六枚組のタピスリーを初めて目にしてから、はや十数年の月日が経っている。

夏だったと思う。クリュニー美術館の内部は薄暗くひんやりとしていて、袖なしのワンピースでは寒いと感じたのを覚えている。だがある一室に入ると、壁全体に展示された六枚のタピスリーのその圧倒的な美しさに、私は思わず息を呑んだ。細密さのもとに保たれた完璧な調和。この上なく優雅な印象のうちは見え隠れする大胆さ。制作期は中世後期で、長年忘れられてぞんざいに保管されていたこの作品を発見したのは、プロスペール・メリメであったということだが、依頼主や作者など詳細には諸説がある。

これまでもこのタピスリーの魅力に囚われた芸術家や学者は少なくなかった。制作の謎に関する調査は今なお盛んに行われているし、リルケやモームは自らの作品にも取り入れている。またマルセル・ブルーストやジョルジュ・サンドの熱狂ぶりも有名であった。私も世界中の愛好者たちの例にもれず、一目ですっかり虜になってしまったわけだが、それにはもう一つの理由がある。

六枚のタピスリーのうち五枚はそれぞれ「視覚」「聴覚」「味覚」「触覚」「嗅覚」と人間の五感がタイトルになっており、六枚目の最も大きく華麗なタピスリーには「我ただひとつの望みに (A mon seul désir)」という献辞と思われるタイトルが付いている。「A mon seul désir」に関しては、何種類もの日本語訳が存在するが、どれも一理あるものの説得力に欠けるのは、不明事項が多いのだから致し方ない事である。私も何と訳すべきなのか判らない。

しかしながら、人間の感覚をタピスリーに託した意味は何なのだろうか。中世の話であるから、そのあたりの時代感覚の解釈も難しい。タピスリーが六枚なのは、偶然なのだろうか。五感に加えて、謎のタイトル。六枚目にこそ謎を解く鍵があるのではないだろうか。などと、このタイトルのことが頭から離れなくなってしまった。つまり十数年来、時折訪れては溜め息をつく『一角獣を連れた貴婦人』の面影と共に、私の頭の中ではおかげですつと、人間の感覚についての思考が続くことになってしまったのである。

人間の感覚とは、本当に五つもしくは六つにきちんと分けられるのだろうか。同時に全部の感覚を感じるのには、どんな状況においてなのだろうか。それに「五感」という言葉は、いつ頃定着したのだろうか。世界中のどんな民族でも「五感」や「第六感」という分け方をするのだろうか。私達は「五感」や「第六感」という言葉に慣れた社会で教育されてきたし、普段はそのことに何ら不都合を感じないが、時代を遡って見てみると、または詩歌の言葉を辿ってみると、五感の区別は全く混沌としている、とは言えないだろうか。

とえいわけ私は、「臭覚」というカテゴリーに興味を持ってきた。「臭覚はすべての感覚の賤民」などと言ったのは確かカントだったと記憶するが、つまり「臭覚」は他の感覚に巻き込まれ易いのである。人間の場合「視覚」や「聴覚」が大量の情報をグローバルに確保するという特徴がある。これを最大限に利用しているのが、テレビであり映画である。視聴者という言葉が示すとおり、観ている者にとって映画の世界には、「臭覚」は存在しないと断言していいくらいだ。「視覚」と「聴覚」からの情報が連想させる「触覚」や「味覚」よりも、「臭覚」の存在感は明らかに薄い。香水の新製品を創る場合、まず名前、そしてフラコンとパッケージのデザインが最重要視されるといふ事実も、「臭覚」のこの性質故であろう。

しかし、一方で鋭敏かつ明確に快感と不快感を決定するのも「臭覚」であり、また強烈な記憶が匂いと共に蘇るといふ経験は、誰にでもあると思う。

私にとって、フリージアの花の香りは、舞台の匂いである。五歳の時、ピアノの発表会で初めて大きな舞台で弾いた。舞台の足元に盛大に飾られていたフリージアの花の香りは、その時の興奮や緊張と相まって、強いライトの光やピントのドレスの肌触りや脚に当たる椅子の冷たさなど、今でもこの匂いを嗅ぐと必ず記憶が反応する。

また、二十歳の時初めて降り立った外国は、マドリッドだった。その時泊まったホテルの、人工的にオレンジの香料を混ぜた代物と思われる洗剤の匂いは、その後何度もヨーロッパの各地で出会ったが、その度にあのマドリッドの夜に巡った思いの断片を反芻するのである。

ジャン・コクトーが『雄鶏とアルカン』という散文の中で、面白いことを書いている。

「感覚。―耳は、ある音楽を認めていなくても、我慢できる。それを、鼻の領域に移してみ給え。僕たちは、きつと逃げ出してしまふよ」

云い得て妙である。「匂いつきの映画」を普及させる必要がない理由もこれに尽きるであろうが、逆に私は音楽家として、この言を座右の銘にしている。

さて、万葉集で「臭覚」を語ろうとすると、いささか戸惑うほど「匂い」や「香り」の表記が少ない。それなのに何故わざわざこの主題を選ぶかと云うと、その思索によって古代人の感覚を垣間見ることが出来るのではないかと思うからだ。しかし、それはあくまでも普通に使われている「五感」もしくは「六感」の分け方は、現代人の便宜であるという意識に則ったことである。

橘のにはえる香かも雀公鳥鳴く夜の雨に移ろひぬらむ 大伴家持

(橘の花の匂う香りは、ホトドキスの鳴く夜の雨で消えてしまわないうるか)

あをによし寧楽の京は咲く花のにはふがごとく今盛りなり 小野老朝臣  
(素晴らしい奈良の都は、今まさに花の盛りのように栄えていることだ)

天平十六年、安積皇子が薨じて大伴家の衰退は決定的になった。家持の歌はその混乱と不安を詠み込んだものである。しかし、この二首にある「にはふ」は橘の花または、咲き誇る花(この時代ではおそらく梅の花のこと)の香りそのものを指している。「あをによし」の歌の「にはふがごとき」の万葉仮名の表記も「薫如」とされていて、言葉上の解釈においても感覚的にも、我々にとつて難解ではない。

黄葉の散らふ山邊ゆ漕ぐ船のにはひに愛でて出でて来にけり 娘子玉槻  
(もみじ散る山のあたりを行く船の美しさに惹かれて、出て来てしまいました)

石竹花が花見るごとに娘子らが笑まひのにはひ思ほゆるかも 大伴家持  
(撫子の花をみるたびに、娘たちの笑みの美しさを感じるのですよ)

この二首に見る「にはふ」の意味は明らかに「臭覚」から遠ざかっている。現代語に訳す場合「美しい」「綺麗」などとするのが無難な例であると思われる。では「にはふ」の語源は何か、を調べているうちに面白いことが分かってきた。

東京大学の多田一臣教授の説によると、「にはふ」という言葉は「に」と「ほふ」

の構成後であると考えられるらしい。まず「に」は万葉表記では多く「丹」と記されており、元来は「土」特に朱色の土砂を指していた。広辞苑で「に」を引くと、驚いたことにちゃんと「土・丹」とある。そしてやがて「丹」は赤系統の色全体を意味するようになった。また「ほふ」の「ほ」は「秀」の字が当てられ、これは目に見えて立ち現れるという意味らしい。「ほふ」は「ほふ(這う)」の変形とも解釈され、総じて周りが染まっていく様子を表しているのである。

話しをもっと突き進めると、「に」が示す赤い色は、古代霊的なものの象徴であった。「に」という言葉は、その色のみならず、霊力または霊的なものの自体をも指していた。例えば「おに(鬼)」という言葉は、「お(大)」と「に(丹)」から成ると考えられる。私は今まで「魂」や「魅」の字に何故「鬼」が含まれているのかと、いつも不思議に思っていた。「魂」の偏のものは「天」を表し、「魂」とは天を翔る「に」のことを云うのなら、「鬼」は現在の我々が連想するようなネガティブなものではなかったものと思われる。また同様に「か(香)」の語源にも、霊力または霊威の意味があるらしい。

我々が今「匂う」や「鬼」という言葉を使う時、それらの「に」の音が同じ意味を持つているとは、到底想像もしないものだが、以上のことをふまえて次の歌を読めば、内容が非常に理解し易くなる。

春の苑紅そのくまにはふ桃の花下照る道に出で立つ娘おとめ子 大伴家持  
(春の庭の桃の花に赤く映える道に出て立つ乙女の美しい姿よ)

紫草むらさきのにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ戀こひめやも 大海人皇子  
(ムラサキのように美しい貴女が憎いのなら、もう人妻である貴女をどうして恋しく思うのでしょうか)

右の二首における「にほふ」はいずれも、色を修辞している。「に」が赤系統の色を表していることは先述のとおりであるが、そこには「紅」は当然のこと「紫」も含まれており、転じて明るく輝いて見える様を言うのにも用いられた。現代の「明るい」という言葉は無論「あか」から派生したものでだろう。これらの歌に見る「にほふ」は、「明るく澁刺とした」または「しつとりと華やいだ」という風に解釈してはどうだろうか。桃の花の色に喩えられる乙女、紫の花のように讃えられる人妻。「視覚」を通していながら、実際には物質的に目で捉えられないものではない何かを言い表そうとするのに、「にほふ」が使われているのが分かる。

大海人皇子の歌は、あのあまりにも有名な額田王の「あかねさす紫の野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」への返歌であり、「紫草のにはゑる妹」とは、当時天武天皇の後宮に入っていた額田王のことである。

白波の千重に來寄する住吉の岸はなの黄生はにうにはほひてゆかな 車持朝臣千年  
(白い波が幾重にも寄せて来る住吉の岸で、その埴生に赤く染まって行くこうでは  
ないか)

草枕旅行く君と知らませば岸の埴生にはほさましを 清江娘子  
(旅の方と存じておりましたなら、岸の埴生で衣をお染め差し上げましたのに)

「埴生」という言葉も「に」から派生したものであろう。万葉集では「埴生」は「黄土(はにふ)」と表記されているが、これは「は(映える)」と「に(丹)」の構成語と考えられる。例えば「はにわ(埴輪)」は、霊的な儀式に輪に並べて使用

された、明るく映える土で造られた祭器である。

「白波の…」の歌での「にほひて」は、土の赤さが自分に照りかえる様を言っており、「草枕…」の方では実際に衣を絞り染めにすることを指している。いずれにせよ、「にほふ」ことで霊感を吸収すると感じ、また旅の安全を願ったものであるかと思われる。

引馬野いくまのにはほふほひはら榛原入り乱り衣にはほふせ旅のしるしに 太上天皇

(引馬野に色づいている榛の木の下にどんどん分け入って、旅のしるしに衣に色移すがよい)

このように見てみると、万葉集では「にほふ」が「臭覚」に関わっている例は非常に少ない、というより、元々「視覚」で受け取ってはいるが目には見えないものに使っていたこの言葉が、時代とともに「臭覚」のために使われるようになった、という方が適切であろう。

平安時代に書かれた『源氏物語』の中では、「にほふ」の表現は「匂う」と「臭う」を使い分けている。しかし、ここでもまた主人公の源氏は「光る源氏の君」と呼ばれ、源氏の次の世代の物語である「宇治十帖」で活躍するのは「薫の君」と「匂うの宮」である。これらの名前は、この人物達の目には見えない魅力を表しているのに相違ない。またこの時代「鬼」はすでに悪霊を指し、面白いことに「鬼は臭し」としている場面があり、「にほふ」の感覚が時代につれて変化していることが窺い知れる。

「視覚」が捉える「目にみえないもの」を表すために、今で言う「臭覚」が最も都合がよかったことは、大いに納得できるものである。

実は何日前、この原稿を書いている最中に『一角獣』(アールベア)という文献を偶然見つけた。中にクリュニー美術館のタピスリーについての章があり、早速読んでみたら、件のタイトルに関する叙述があった。なんと、「五感」の副題は最初から付いていたのではなく、一九二一年に英国のP. H. ケンドリックという美術史学者が提出した論文によるもので、その後クリュニー美術館のコンセルヴァトワールによって承認され現在に至るのだそうだ。

複雑な気分になった。オリジナルではなかったのか。それなのに、そのタイトルに長年執着して、色々なことを考えた。まるで騙されたような感覚が残るには残るが、それにしても巧くつけたものである。

しかし考えてみれば、きっかけは何であれ、これまで私が辿った「感覚」に関する思考は様々な広がり提示してくれたし、「五感」のタイトルがもたらすイメージは『一角獣をつれた貴婦人』の美しさを少しも損なってははいない。それに、あのタピスリーの色こそ「に」の色であると知ったではないか。

数年前に発表した歌曲集『陸魂』の中の私の歌は、飛行機の窓から見た「に」の色に輝く雲海を詠んだものであった。「にほふ」の語源も何も知らなかったにも拘らず、今読むと先述の言葉が揃っていて不思議である。

「あかねさす紫に染むあかね雲たまたまあふ如く染まり切りたし」

しかも空を飛んでの旅の途中で、あかね雲に染まりたいなどと、ひよつとするとあの時「にほえる天を翔る霊」を見たのかも知れない。